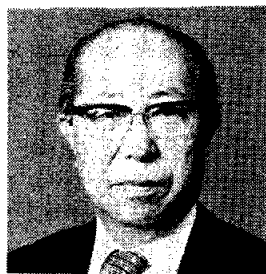


コメント

WWF日本委員会の活動



大来佐武郎(おおきた さぶろう)

1914年中国、大連生まれ。東京大学電気工学科卒。経済企画庁を経て、海外経済協力基金総裁、外相などを歴任。1980年より、地球的規模の環境問題に関する懇談会座長、1985年より世界自然保護基金日本委員会(WWF-J)会長。

自然保護の問題についての関心が日本で高まって来たのは、最近のことです。WWF-Jの会員数も、昨年二月から今年の二月までの一年間に、四〇〇〇人から六七〇〇人に増えました。五〇%以上の増加といっても、各国のWWFと比較して元が少ないのでなお一層会員数が増やせるように頑張らなくてはなりません。

スウェーデンは環境問題について非常に先進国で、

一九七二年当時すでにストックホルム国連人間環境会議を組織したということは、皆様ご存知のとおりです。また最近では、昨年にヨテボリ、ボルボの工場のある町ですが、そこでエコロジー・'88という会議がありました。

日本のWWFについて少しお話しますが、礼宮文仁殿下が総裁になっておられます。名誉総裁の規程があり、それをお願いしたところ、「名前だけの総裁でなく、名誉を外して欲しい。WWFの活動に非常に興味があるから……」といわれ、急遽定款を改正致しました。フィアンセが礼宮殿下にひかれた理由の一つに、「殿下が自然保護に関心をお持ちであることが分かったこと」をあげておられました。そういうことで、次の世代の日本人はWWFのような活動に対する関心をだんだん強めてくると思います。我々の世代は戦争で破壊された経済を、どうやって建て直そうかということで一ぱいで、環境問題に十分注意を払う余裕も無かったとも言えます。しかしこれからの日本は、経済的、科学技術的な能力をもつて、世界の環境問題の改善に貢献できる立場になっております。

日本における環境問題の具体的テーマに、絶滅の危機に瀕する野生生物の国際取引に関するワシントン条約があります。これは一〇年前私が外務大臣の時に批准しました。そのモニタリング活動をするトラフィックジャッパンは、一九八二年にWWF Jの特別委員会として設立されたものです。

また南西諸島の保護も大きなテーマです。WWF インターナショナルの会長エジンバラ公が来日された時、「日本の南西諸島に生息する動植物の種の数は、全ヨーロッパの種の数より多く、これは日本のみならず、世界全体の資産であるから大事に守って

欲しい」と言われました。

熱帯林に関するITTO（国際熱帯木材機関）を日本に誘致するにあたって、故郷細横浜市長が非常に熱心で、私とその運動をお手伝いしました。ITTOは熱帯材の利用と保全の両立を旨とし、WWFの活動とも密接な関係を持っております。

また湿原保護の分野があります。北海道にも釧路湿原など重要な湿地があり、釧路市は、一九九三年にラムサール条約の会議を釧路に招く準備をしております。

最近、日本政府も環境問題に対する関心を強めており、昨年七月パリのサミットでは、日本の首相は、今後三年間に三千億円を途上国の環境保護のために拠出すると約束しました。すでにその一部で北京、バンコクに環境問題研究所とトレーニングセンターを作ることも始められています。WWF Jの役割の一つは、このように政府が予算を急激に増やし、プロジェクトの推進を図る時、良いアイデアを提供することで、これは世界的なネットワークを持つWWFの強みでもあります。

先程小野先生もいわれたようにSO₂の放出量が六分の一に減ったとか、二〇年間に相当な成果をあげています。そういった成果を他の国に役立てるのも日本の役割の一つだと思えます。

一九八二年にストックホルム会議一〇周年の国連会議がナイロビで開かれた時に、日本代表は、「地球環境問題に関する世界委員会を作るべきではないか、もし国連がこの計画を承認すれば、日本政府は委員会の費用の相当部分を支出する用意がある」と発言しました。これによりWCED（世界環境開発委員会 World Commission on Environment and Development）が一九八三年秋の国連総会で設置

され、委員長には、ノルウェーのブルントラント首相がなり、私も委員を務めました。このような次第でWCEDは国連ではジャパニーズ・プロポーザルと呼ばれました。このように私共も世界の環境問題に、少しづつ貢献してきましたが、今後は更にその努力を強化してゆかなければならないと思います。

